

縄文時代における東京湾東沿岸地域の海進海退(1)

武 田 宗 久

I 東京湾の範囲と海底地形

東京湾の海域は房総半島の西端洲崎と三浦半島の剣ヶ崎を結ぶ線以北である。このうち、内湾または狭義の東京湾と呼ばれるのは、房総側富津岬と三浦側観音崎を結ぶ線以北を指し、外湾と呼ばれるのはこの線以南の部分で、この線は浦賀水道といい、『古事記』では「走水」、^{はしりみず}『日本書紀』では「馳水」、^{はしりみず}『古語拾遺』では「湊水門」^{みなみのかど}などと呼んでいる。

内湾の海底は北東から南西方向にゆるやかに傾斜し、富津岬の北西約5キロのところに、「中ノ瀬」と呼ぶ浅海があって、この西側を「古東京川」（水深50米）がS字状に蛇行しつつ「東京海底谷」（水深100米）に達している。

外湾は今から約100万年前に、一続きの房総三浦丘陵であったものが、数万年前に陥没してできた海溝部で、これが「東京海底谷」の前身である。

「古東京川」の谷を北にたどると、江戸川・古利根川・元荒川・荒川などの旧河道に続く。その成因は洪積世最後の氷河期（ウルム氷期）の海面低下の時期に刻んだ谷川で、その年代は東京都中野区江古田にある古利根川の川底に堆積した松柏科植物化石層の放射性同位元素¹⁴Cの測定によると、今から1万1千年～2千年前である。

つまり、このころの内湾は完全に陸化した巨大な盆地で、その地形は北東に高く、西南に傾斜していたから、周囲の丘陵を開削しながら流れ出た河川が集まって「古東京川」となり、盆地の西側寄りに南下して、「東京海底谷」の海に注いでいた。

II 縄文時代の海進と東京湾の誕生

ところが、ウルム氷期に終りを告げ、次の後氷期の時代、言葉を換えていえば、沖積世初頭を迎えると、気温が上昇したために、北半球の氷河や氷雪の大部分が溶けて海中に流れこみ、世界的な海進現象が起った。これをアトランティック海進ともフランドル海進ともいうが、日本では1909年に東京の有楽町の地下に海成層が発見され、有楽町層と名付けられたのにもとずいて、有楽町海進と呼び、1万6百年前から僅かに海面が上昇し、2回の停滞期を経て、約1万年前から急激な海進に移行した。このため、陸化していた東京湾では、「東京海底谷」にあった海岸線が、「古東京川」の谷に沿って北方に移動し始めた。

このころ、横須賀市若松町にある平坂貝塚や同市夏島町にある夏島貝塚が作られた。この状態を夏島貝塚の文化相や魚貝類から窺ってみよう。この貝塚はかつては海上に浮ぶ小島に所在し、「東京海底谷」(久里浜沖)から直線距離で約15キロ北にある。調査報告によると、遺跡は標高20米の崖端にある斜面貝塚で、7つの文化相に分かれていた。最古の文化相は井草・大丸式に属する土器で、貝層下の土層中に発見された。貝層は下から第1貝層、第1混土貝層、第2貝層、第2混土貝層、第3貝層の順序に堆積し、その上に表土がある。

第1貝層中の土器は夏島式で、マガキとハイガイなどの砂泥性の内海に棲む鹹度の低い貝類が90%を占め、半鹹半淡のヤマトシジミが少量検出された。魚骨はスズキとクロダイが最も多いことから、井草・大丸式の時期には漁撈を営んだ形跡がないけれども、夏島式の時期になって海との接触が始まった。当時の環境はこの付近に淡水の流れこむ河口があって、そこにヤマトシジミが生棲し、泥海底の一部にはマガキやスズキ・クロダイなどが棲む岩礁があったと思わせる。この第1貝層の¹⁴Cによる測定年代は $9,450 \pm 400$ 年であるから、少なく見積っても9,000年前のことである。

この上の第1混土貝層は田戸下層式を含み、貝類は前者よりも鹹度が高く、しかも遠浅な砂地に棲むアサリ・ハマグリが多く、魚骨ではクロダイよりもマダイが多いことから、この時期になると海進が徐々に進行していたことを示している。

なお、その上の第2貝層は田戸上層式、第2混土貝層は子母口式、第3貝層は茅山式で、いずれもアサリ・ハマグリを中心とした純鹹貝類からなり、表土からは関山式が出土した（註1）。

また、夏島貝塚の北西1キロ半のところにある野島貝塚は、約7,000年前の野島式期の標準貝塚で、貝類はマガキが多いが、アサリ・カガミガイ・オニアサリ・アカニシなどもかなり含まれる。ただハイガイは極めて少なく発育も悪い。また、エゾタマガイのような寒冷水温のものが見られることから、この時期は水温がやや低くなっていたことが知られる（註2）。

Ⅲ 奥東京湾の成立と貝塚分布の状況

こうして海水は徐々に、しかも確実に北上を続け、江戸川流域では茨城県古河市、元荒川流域では埼玉県鴻巣市近くまで浸入した。それは約6,000年前の関山・黒浜式期のころであった。こうして奥東京湾が形成され、満潮時にはこれよりかなり奥地にまで潮流がさしこんでいたらしく、江戸川流域では東京都の埋立以前の海岸線から約70キロ内陸に入り、栃木・群馬・茨城三県の境に接する赤麻沼（遊水池）沿岸にもいくつかの貝塚が作られた。

中でも最奥にあるのは栃木県下都賀郡藤岡町の篠山貝塚である。標高20米、沼表面との比高は5米で、貝層中に前期中ごろの関山式土器を含み、貝類の95%以上はヤマトシジミとマシジミであるが、マガキ・イタボガキ・ハイガイ・ハマグリ・シオフキなども混入する（註3）。この貝塚から南へ3キロ以内には早期末葉の茅山式期の北貝塚・一峯神社境内貝塚、前期中ごろの黒浜式期の野渡貝塚があり、赤麻沼の西方には関山式期の板倉貝塚があり、いずれもヤマトシジミとマシジミを中心とする貝塚である。

江戸川流域をこれより10キロ下がった右岸の山王山貝塚（茨城県猿島郡五霞村）・浮戸貝塚・診療所前貝塚やさらに5キロ下った同村土塔貝塚（江川貝塚）は、いずれもハマグリ・アサリ・シオフキを主とする関山・黒浜式期の純鹹貝塚、さらに下った埼玉県北葛飾郡杉戸町の木津内貝塚・目沼貝塚、左岸の千葉県東葛飾

郡関宿町の元町貝塚（雲国寺内貝塚）なども同時期か前期中ごろの純鹹貝塚であるが、五霞村の小手指貝塚は中期前半の阿玉台式期の貝塚で、ヤマトシジミが多く、マガキがこれに次ぎ、ハマグリ・サルボウ・シオフキ・アカニシなどのほかに、淡水産のカワニナ・タニシなどもある。また同村冬木貝塚・関宿町の篠台貝塚は後期後半の加曽利B・安行I式期の主淡水貝塚で、いずれも標高10米前後の微高地にあることが注目される。

このあたりから、埼玉県栗橋、茨城県古河、埼玉県加須・鷺宮・久喜・幸手を結ぶ一帯の地域は関東造盆地運動の沈降の中心部であるから、海進のピークを過ぎても容易に海退に向かわず、各地にラグーン的景観が見られたことを思わせる。

大山史前学研究所（註4）・甲野勇（註5）・江坂輝弥（註6）らの研究によれば、こうした状況は古利根川・元荒川・荒川の3河川の流域に分布する多数の貝塚の文化相・魚貝類の種別によってほぼ同様であることが知られるが、近年大宮市寿能泥炭遺跡の自然科学的調査の結果によれば、縄文海進の最高海面は標高約3米で、諸磯a式期に相当し、前期末葉の十三菩提式期には、すでに海退していたと報告されている（註7）。

貝塚爽平の「下末吉面の高度分布図」によれば、この大宮・川越・上尾・蓮田・岩槻を結ぶ線には関東造盆地運動の沈降中心地区とは別の沈降地域があったのであろう。また東京都北区中里にある低地遺跡は荒川の旧下流隅田川右岸の本郷台と呼ばれる台地直下にあって、その最下層の波食台は最高海水面の時期を示し、標高3.50～4.63米であり、諸磯a式期とも五領ヶ台式期とも想定された（註8）。いずれにしても、このあたりは関東造盆地運動の外縁部に相当するところで、前期中ごろ乃至中期初頭のいずれかの時期には、浅海砂泥性の波うちぎわであった。

IV. 現東京湾西岸地域の貝塚分布

東京都と川崎市の境をなす多摩川の上限貝塚は右岸では現海岸線から約14キロの川崎市高津町にある久本貝塚（諸磯b式期）で、ヤマトシジミを主とする主淡水貝塚、左岸では約15.5キロの東京都世田谷区玉川瀬田町の瀬田貝塚（諸磯b式期）

で、ハマグリ・マガキを主とし、ヤマトシジミもある主鹹貝塚、これより約1キロ下がった同区玉川野毛町の六所東貝塚（黒浜・諸磯b式期）は、ヤマトシジミとハマグリが最も多い淡鹹貝塚で、標高35米、沖積底地との比高は15米であり、これより更に3キロ下がった太田区田園調布の上沼部貝塚は後期前半の堀之内・加曽利B式期の純鹹に近い主鹹貝塚となるので、前期中ごろの海汀線は六所東貝塚と上沼部貝塚の中間位の現標高10米前後の谷底と思われる。

次に横浜市に注ぐ鶴見川の上限貝塚は現海岸線から約12キロの港北区折本貝塚（黒浜・諸磯b式期）で、ハイガイ・マガキ・サルボオ・ハマグリなどの主鹹貝塚、右岸の上限貝塚は神奈川区上菅田貝塚（黒浜・諸磯b式期）で、貝類は前者と同じ主鹹貝塚、また鶴見川の支流早淵川の上限貝塚は、約15キロの港北区境田貝塚（諸磯b式期）で、ハイガイ・マガキ・ハマグリ・アサリ・カガミガイなどの純鹹貝塚、それより少し下ったところにある同区西ノ谷貝塚（里浜式期）・南堀貝塚（黒浜・諸磯b式期）・茅ヶ崎貝塚（黒浜・諸磯b式期）などは、いずれも純鹹または主鹹貝塚である。

そして、鶴見川と早淵川との合流点を中心とした鶴見川入江とも云うべきやや広大な沖積低地周辺の台地には、峯谷貝塚・南綱島貝塚・師岡貝塚・駒岡貝塚・梶山貝塚・上台貝塚・表谷東貝塚・表谷西貝塚・菊名貝塚など、いずれも黒浜・諸磯式期の貝塚が半径2.5キロ以内に群集し（註9）、しかも純鹹または主鹹の貝類相を示し、中・後期の貝塚はこれより下流の周辺台地の斜面に散在する。

横浜市金沢区称名寺貝塚は標高5米、現海岸より直線距離で300米余の砂丘上にあり、A地点の上部貝層は称名寺式、下部貝層は加曽利E式、その下の砂層に五領ヶ台式と勝坂式土器の小破片が検出され、B地点の貝層中下部から称名寺式、上部から堀之内I式が出土したという（註10）。

このような貝塚分布の状況から、現東京湾西岸地域の海進は、前期中ごろに最高海面となり、各河谷の奥部に多数の貝塚集落が作られたが、以後急足に海退して、中期初頭のころには、早くも現海岸線近くの沖積低地（標高5米未満）にまで海退していたことを思わせる。

- 註1. 杉原莊介・芹沢長介「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」(『明治大学文学部研究報告考古学』第2冊)昭和32年。
- 註2. 赤星直忠「神奈川県野島貝塚」(『考古学集刊』No.1)昭和23年。
- 註3. 岡本勇・塚田光「栃木県藤岡貝塚の調査」(『考古学集刊』No.4)昭和37年。
- 註4. 大山史前学研究所『縄文式石器時代の編年学的研究豫報』昭和8年。
- 註5. 甲野勇『埼玉県柏崎村眞福寺貝塚調査報告』昭和3年。
- 註6. 江坂輝称「海岸線の進退からみた日本の新石器時代」(『縄文土器文化研究序説』所収)昭和57年。
- 註7. 堀口万吉「寿能泥炭遺跡の自然環境」(埼玉県教育委員会『寿能泥炭遺跡発掘調査報告書』)昭和59年。
- 註8. 東北新幹線中里遺跡調査会『中里遺跡1』p.123・282、昭和62年。
- 註9. 神沢勇一「師岡遺跡」(神奈川県立博物館『神奈川県立博物館発掘調査報告書』14号)昭和57年。
- 註10. 吉田格「横浜市称名寺貝塚発掘調査報告」(武蔵野文化協会『東京都武蔵野郷土館調査報告書』第1冊)昭和35年。

V 現東京湾東岸地域の貝塚分布

ここにいう東京湾東岸地域とは、千葉県市川市から君津郡富津市に至る延長約80キロ余の東京湾(内湾)の沿岸で、千葉・市原両市を中心とし、東京湾に向けて扇形に南北に展開する浅海砂泥性の海岸に望む周辺一帯の地域を指す。そこには北西に低く南東に高い標高30~300米の両縁台地に水源を発し、樹枝状の谷を開削して下流に沖積平野を開きつつ、東京湾に注ぐ中小の河川がある。その主なものは、北方から真間川、海老川、花見川、都川、村田川、養老川、小櫃川、小糸川である。

縄文時代の貝塚乃至貝ブロックを包含する遺跡は、主としてこれらの河川の沿岸台地の縁辺に分布するが、希に海底埋没貝塚もあり、筆者の知り得た範囲では合計299ヶ所である。但しこの中には江戸川流域に面する松戸七畝割1貝塚(26)・

陣ヶ前貝塚(27)・柿ノ木台貝塚(28)と、印旛沼に注ぐ神崎川水系の海老ヶ作貝塚(126)、同じく印旛沼に注ぐ鹿島川水系の中三角貝塚(240)・中野僧御堂遺跡(234)・八反目台貝塚(235)・宮ノ台貝塚(236)・野呂山田貝塚(182)・荒立貝塚(239)を除くと、総数289ヶ所となる。これらの遺跡を、下総台地に面する北半部(市川市～千葉市)と、上総台地に面する南半部(市原市～富津市)に2分し、各時期の貝塚乃至貝ブロック包含遺跡の分布を見ると、次のようになる。

北 半 部

(1)真間川沿岸

松戸市南部に源を発し、市川市を貫流する真間川本流(国分川)は延長約14キロ、真間川の支流大柏川は本流との分岐点まで延長約6キロで、この分岐点の北方には北から南にV字状に張り出す宮久保～曾谷丘陵が望まれ、そこには早期から後期にわたって漁撈生活を営んだ多数の貝塚集落が密集する。

国分川の上限貝塚は谷奥に近い陣屋前Ⅱ貝塚(1)・子和清水貝塚(2)・新山貝塚(3)・鳥井戸貝塚(4)などである。このうち、陣屋前Ⅱ貝塚(陣屋前B貝塚)は阿玉台・加曽利EⅠ式期の小貝塚、子和清水貝塚(日暮柏葉台貝塚)は阿玉台・勝坂・中峠・加曽利EⅠ・加曽利EⅡ式期の小貝塚群からなる点在馬蹄形貝塚で、標高27～28米、谷との比高は8.2米、貝類はハマグリ、アサリ、イボキサゴ、サルボオ、オキアサリ、ウミニナを主とし、魚骨はクロダイ、ヘダイ、スズキ、シタビラメなどからなる純贗貝塚。新山貝塚は阿玉台・勝坂・加曽利EⅠ・加曽利EⅡ式期の小貝塚である。鳥井戸貝塚については、松戸市教育委員会『松戸の遺跡』に地点貝塚として、花輪台・田戸上層・茅山・関山・黒浜・諸磯b・浮島・興津・阿玉台・加曽利B・安行Ⅲb式期の土器を出土し、貝類はアサリ・サルボウ・バイ・キサゴとあるが、これらはすべて表面採集によるものであるから、貝層中にどの時期の土器が含まれているか明確でない。

さて、国分川の左岸では、子和清水貝塚より1.5～20キロ下がると、東南方に分れた支谷の左岸に河原塚Ⅱ貝塚(5)・河原塚貝塚(6)・西金楠台貝塚(7)・

坂之台貝塚（8）があり、右岸に中峠貝塚（13）・内野貝塚（12）・紙敷貝塚（11）・新堀込貝塚（10）・栗芝台貝塚（9）・天殿台貝塚（30）などがある。右のうち、発掘によって判明した貝層中の土器は、河原塚Ⅱ貝塚（堀之内Ⅰ式）・河原塚貝塚（堀之内Ⅰ・同Ⅱ式・少量の加曽利Ⅱ式）・西金楠台貝塚（加曽利Ⅱ末葉・称名寺式）・中峠貝塚（阿玉台・勝坂・中峠・加曽利ⅡⅠ・Ⅱ・Ⅲ式）・紙敷貝塚（阿玉台・加曽利Ⅱ式）であって、他の貝塚出土の土器はすべて採集によるものである。

国分川左岸を更に下がった秋山向山貝塚（19）も阿玉台・勝坂・加曽利Ⅱ式期の点在ブロック貝塚であるが、これより東南方500米のところにある牧之内貝塚（24）は、小貝塚群からなる点在貝塚で、茅山式Ⅰ片・黒浜・浮島・諸磯Ⅱ・阿玉台・加曽利Ⅱ・堀之内式期の土器が採集されているから（註1）、未発掘であるが、このあたりが前期貝塚の上限ではないかと思われ、本貝塚からさらに南へ約1キロ余下がった曾谷貝塚貝塚（43）を皮切りに、宮久保～曾谷丘陵の縁辺には、早期乃至早～前期、あるいは前期の土器を貝層に包含する遺跡が多い。いまその主なものを挙げると、イゴ塚（45）・曾谷（44）・根古屋（50）・高德穂（51）・三中校庭（52）・宮久保A（53）・宮久保所願寺（54）・山ノ後（55）・庚塚（65）などの貝塚である。

右のうち、イゴ塚貝塚（黒浜・諸磯・堀之内・加曽利Ⅱ）は標高8米、根古屋貝塚（花輪台・茅山・諸磯・五領ヶ台・下小野・堀之内・安行Ⅰ・同Ⅱ）は標高7米の沖積段丘の砂丘上にある。また本丘陵最大の馬蹄形貝塚として知られる曾谷貝塚は、早期中ごろの田戸下層式期から晩期初頭の安行Ⅲa式期までの遺跡であるが、発掘によって知られる範囲では、「黒浜期と加曽利ⅡⅢ式期から安行Ⅰ式期までの貝層が確認された」（註2）という。

次に国分川右岸では谷奥の陣屋前Ⅱ貝塚（1）から約2キロ半ほど下がったところにある西北方に向う支谷に面して下水貝塚（14）と通源寺貝塚（15）がある。前者は中～後期の小貝塚であるが、後者は点在馬蹄形の貝塚で、前期の黒浜式と中～後期の遺跡として早くから知られたが、下総史料館の記述によれば、黒浜式

期に伴う貝層の存在は殆んど無いものと思われる(註3)。この貝塚から南西へ約2キロ半下がった堀の内貝塚(34)までの11ヶ所の貝塚の中で、白幡貝塚(17)以外の遺跡は中期または中～後期である。白幡貝塚は『松戸の遺跡』(註4)に興津・勝坂・加曾利E・堀の内式期とあるが、前期末葉の興津式に貝層をを伴う確率は少ない。

現時点で国分川右岸の前期の貝塚で、最奥の遺跡は、堀の内貝塚南側の谷を距てた台地縁辺にある北台貝塚(38)であろう。標高24米、谷比高14米、黒浜・諸磯a・b・c・浮島I・II・III・興津式期の点在馬蹄形貝塚であり、近くにある中台貝塚(37)は黒浜・諸磯a式期の小貝塚である。また前期の貝塚で最下流域にあるのは、標高5～7米の砂丘上にある久保上貝塚(40)で、黒浜・諸磯a・浮島III・興津式期、この近隣にある諸貝塚下遺跡(42)は標高10米弱、黒浜式期の竪穴住居址を発掘、根郷留見貝塚(41)は標高10米、関山・黒浜・諸磯a・浮島II・五領ヶ台式期である。

真間川の支流大柏川沿岸を見ると、谷奥にある中沢貝塚(89)は堀之内・加曾利B・安行I式期に貝層を伴う純鹹に近い主鹹貝塚で、標高30米、水田面との比高11米の馬蹄形貝塚、これより下がった右岸の木戸脇(90)・一本松(91)・栗子台(92)・根郷No1(96)・根郷No3(97)・鳴神山B(56)・鳴神山A(57)は中期または中～後期で、前期の貝塚は中沢貝塚から約3キロ余下がった殿台貝塚(59)で、黒浜・諸磯a・b・浮島I・III式期である。

また左岸では、中沢貝塚から約1～2キロ下がった範囲に、外和戸貝塚(93)など7つの小貝塚群があり、いずれも中期である。前期の貝塚で最奥にあるのは、この貝塚群よりさらに下がった位置にある株木A貝塚(67)で、標高約9米を測る低地にあり、黒浜・諸磯a・浮島I式期である。

これより南に下がると、真間川の旧湾口部に近い台地上に占地する美濃輪台A貝塚(88)に至る間、約3キロの間に26余りの大貝塚群がある。その主なものを挙げると、杉ノ台貝塚(72)は貝層中に早期の茅山式、このほか鶉ヶ島台式、前期の花積下層・諸磯b・浮島I・III・興津式、中期の下小野、後期の称名寺・堀

之内Ⅰ式。法伝貝塚(82)は早期の茅山式、前期の黒浜・諸磯c・浮島Ⅱ・興津式、中期の下小野・五領ヶ台・阿玉台・勝坂・中峠・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ式。法蓮寺山貝塚(106)は貝層中に前期の黒浜・諸磯a・c・浮島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・興津・十三菩提式、このほか貝層外に中期の下小野・阿玉台・加曽利EⅡ・Ⅲ式、後期の称名寺・加曽利B式期の土器も出土する。下郷後貝塚(105)は早期の茅山式、前期の黒浜・諸磯式・中期の加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式、後期の安行Ⅰ・Ⅱ式。三角貝塚(83)は早期の茅山式、前期の黒浜式期。東新山貝塚(85)は貝層中に前期の黒浜式、このほか前期の諸磯a・浮島Ⅲ・興津式、中期の下小野・阿玉台・加曽利EⅢ式。美濃輪台A貝塚(88)はハイガイ・マガキなどの貝ブロックを伴う炉穴に、早期の茅山上層式、このほか早期の鵜ヶ島台式、前期の浮島Ⅲ式、中期の下小野・五領ヶ台式も検出される。以上のほか、前期の貝塚と予測されるものに、新川上A(69)・新田前(70)・池端(71)・七畝畑(84)・花ヶ谷台(87)などがある。

次に中・後期では、株木B(68)・卵塔前A(73)・奉免安楽寺(75)・奉免南(76)・姥山西(77)・姥山(78)・内荒久(79)・今島田(80)・今島田東(81)・藤原観音堂(103)・中法伝(104)・貝柄塚(86)・古作(111)などの諸貝塚がある。

この中で、姥山貝塚と古作貝塚は馬蹄形貝塚として早くから知られ、前者はこれまでの発掘調査の段階で知り得た貝層形成の時期は、中期の阿玉台・中峠・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ式、後期の堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ式であるという(註5)。古作貝塚は昭和3年中山競馬場設置によって破壊されたために、全貌を知ることができないが、その際に発見された堀之内式の貝輸入り完形蓋付土器2個は貴重な文化財である。船橋市教育委員会が昭和56～57年、同所の高電圧線埋設工事予定地部分と旧厩舎の空地を調査した結果によると、貝層形成の時期は、後期初頭の称名寺式期から堀之内Ⅰ式期であるという(註6)。しかし、発掘区から出土した土器は加曽利EⅣ・称名寺Ⅰ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa式であること、古作貝塚の一部と思われる可能性が強い貝柄塚貝塚(111)出土

の土器が加曾利EⅢ・堀之内I・加曾利B・安行I式であることなどを勘案すると（註7）、本貝塚は中期の後半から後期にわたる漁撈集落であろう。

また、昭和56年に奉免安楽寺貝塚の一部を発掘した報告によると（註8）、本貝塚の立地は標高8～9米、現水田面との比高は3～4米の低段丘上にあり、貝層下土層からは早期の茅山式、前期の黒浜式、貝層からは加曾利BⅠ・Ⅱ式が検出されたという。なおこの発掘以前に表採された諸記録では、勝坂・阿玉台・加曾利E・堀之内式期のものもある（註9）。

＜鳥井戸貝塚（4）の問題点＞

この貝塚が真間川本流（国分川）の谷奥にある小貝塚で、早・前・中・後・晩期の土器を出土し、自然遺物にアサリ・サルボウ・バイ・キサゴ（イボキサゴ）があることは、すでに述べたところであるが、これらの土器のうち、いずれの時期に貝層が伴うかという問題は、発掘調査による以外に解明する方法はない。しかし、すでに宅造によって消滅し去った現時点では、本貝塚の立地と同様の環境にある陣屋前Ⅱ貝塚（1）・子和清水貝塚（2）・新山貝塚（3）と、これらの貝塚の近隣にある貝層を伴わない遺跡の内容を検討することによって、ある程度の推測は可能であろう。

さて、これらの貝塚のうち、陣屋前Ⅱ・新山の両貝塚も調査前に宅造によって消滅しているが、表採による限りでは中期の遺跡である。子和清水貝塚は、昭和37年、43年、47～50年の3度にわたって発掘調査が行なわれ、その結果竪穴住居址278基、小竪穴1000余基、埋葬人骨3体などを検出した他、多量の遺物を出土した点在馬蹄形の貝ブロック遺跡であって、中期の大集落であることが確認された。『松戸の遺跡』には本貝塚出土の貝として鹹水系31種類が載っているが、その中にアサリ・サルボウ・バイ・キサゴがあり、同書の鳥井戸貝塚のところにも、同じ貝類が書かれているが、早～前期の貝塚に必ず検出されるハイガイやマガキは見えず、内湾の中～後期に多産するキサゴ（イボキサゴ）がある。このことは鳥井戸貝塚にはその2種類の貝はあっても極めて少ないことを示すとともに、本貝塚

国分川谷奥周辺の縄文時代遺跡

遺 跡 名	所 在 地	種 別	型 式	資 料
陣屋前Ⅱ	松戸市金ヶ作陣屋前	地 点 貝 塚	阿玉台・加曾利EⅠ	松戸市教育委員会『松戸の遺跡』昭和51年
子と清水 (日暮柏藪台)	日暮子と清水・小山台・ 金ヶ作新山	点在馬蹄形貝ブロッ ク貝塚	阿玉台・勝坂・中峠 加曾利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ	明治大学考古学研究所『Microlith 22号』 昭和43年、高橋良治・塚田光・小片保『千葉 県子と清水貝塚調査概報』（考古学雑誌49- 2）昭和38年、松戸市教育委員会『子と清水 貝塚遺構図版編』昭和51年
新 山	松戸市金ヶ作新山・日 暮小山台	地点貝塚	阿玉台・勝坂・加曾 利EⅠ・Ⅱ	松戸市教育委員会『松戸の遺跡』昭和51年
烏井戸	松戸市日暮烏井戸	地点貝塚	花輪台・田戸上層・ 茅山・関山・黒浜・ 諸磯b・浮島・興津 阿玉台・加曾利B・ 安行Ⅲb	同 上
初富飛地Ⅱ	松戸市初富飛地	包含地	阿玉台・加曾利EⅠ	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分 布地区(Ⅰ)』昭和60年
初富飛地Ⅰ	同 上	同 上	茅山・浮島・五領ヶ 台・阿玉台・加曾利 EⅣ・称名寺	同 上
五香六夷元山Ⅰ	松戸市五香六夷元山	同 上	阿玉台・加曾利EⅢ ・Ⅳ・称名寺	同 上
北 山	松戸市串崎新田北山	同 上	加曾利EⅡ・堀之内 Ⅰ	同 上
矢深作	松戸市田中新田矢深作	同 上	黒浜・浮島・諸磯・ 五領ヶ台・阿玉台・ 称名寺・加曾利B	同 上
生 松	松戸市田中新田生松	同 上	花輪下層・関山・黒 浜・浮島・堀之内Ⅰ	同 上
陣屋前Ⅰ	松戸市金ヶ作陣屋前	同 上	阿玉台	松戸市教育委員会『松戸の遺跡』昭和51年

が中期以後のものであることを暗示する。

次に真間川本流の谷奥にある前記4貝塚の周辺約1.5キロ以内の遺物包含地出土の土器型式を見ると、鳥井戸貝塚出土の花輪台・田戸上層式期のものはないが、早期末葉から前期のものは初富飛地Ⅰ・矢深作・生松などの遺跡にあって、且つこの3遺跡は鳥井戸貝塚が占地する同一の支谷の縁辺台地にある。従って鳥井戸貝塚から早～前期の土器が出土するのは決して不思議ではないけれども、この時期に貝塚を作ったとは考えられない。

註1. 江森正義「牧之内遺跡」(下総史料館『かみしき』6) 昭和46年。

註2. 堀越正行「千葉県市川市曾谷貝塚の発掘調査」(『日本考古学協会第45回総会・研究発表要旨』) 昭和54年。

註3. 湯浅喜代治「通源寺遺跡」(下総史料館『かみしき』10) 昭和48年。

註4. 松戸市教育委員会『松戸の遺跡』昭和51年。

註5. 市川市史編纂委員会『市川市史』第1巻 昭和46年。

註6. 船橋市遺跡調査会・調査団『古作貝塚』昭和57年。

註7. 『市川市史』第1巻。

註8. 市川市教育委員会『昭和56年度埋蔵文化財発掘調査報告』昭和57年。

註9. 堀越正行「奉免安楽寺貝塚の提起する問題」(『史館』14号) 昭和58年。

なお、本稿のつづきは『貝塚博物館紀要』第16号(昭和63年度出版)以降の号に掲載の予定です。

松 戸 市

No	通しNo	市町村別	原爆文分布 地 図 No	貝屋・貝ブロッツを含む 遺 跡	所 在 地	貝 屋 形 成 時 期				
						早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期
1	1		22- 74	障 壁 前 II (障壁前B)	金ヶ作障壁前					
2	2		22- 77	子 和 滑 水 (日暮・日暮柏葉台)	日暮子和滑水・小山台・金ヶ作新山					
3	3		22- 78	新 山	金ヶ作新山・日暮小山台					
4	4		22- 83	島 井 戸						
5	5			河 原 塚 II	紙敷西金桶台					
6	6		22-113	河 原 塚	紙敷西金桶台					
7	7		22-114	西 金 桶 台 (金 桶 台)	紙敷西金桶台					
8	8		22-115	坂 之 台 (大坂台・大坂台北)	紙敷坂之台・東金桶台・西金桶台・別 堀込					
9	9		22-140	栗 芝 台 (天 戸)	紙敷栗芝台・太山					
10	10		22-139	新 堀 込	紙敷新堀込・重兵衛山					
11	11		22-137	紙 敷 (紙敷花輪・紙敷東・向)	紙敷花輪・向・外花輪・名木					
12	12		22-135	内 野 (中峠東・中峠B・高塚中台)	紙敷中峠・高塚新田内野					
13	13		22-133	中 峠 (中峠A)	紙敷中峠					
14	14		22-100	下 水 (下州池・松戸新田下項台)	和名ヶ谷下水・不動前・吉兵衛屋鋪					
15	15		22-101	通 原 寺 (和名ヶ谷)	和名ヶ谷通原寺・二反割					
16	16		22- 99	和名ヶ谷溜台 (北谷津)	和名ヶ谷溜台・飯訪原					
17	17		22-153	白 堀	大橋白堀					
18	18		22-152	内 山	大橋内山					
19	19		22-142	秋山向山	秋山向山・宿					
20	20		22-156	南 台 (南谷岸)	大橋南台					
21	21		22-157	南 台 畑 (南谷岸B)	大橋南台畑					
22	22		22-151	大 塚 越	大塚大塚越・北大塚					
23	23		22-159	大塚向山 (大塚・大作)	大塚向山・南山					
24	24		22-145	牧 之 内 (神 宿)	秋山牧之内・神宿・堀込					
25	25		22-147	堀 込 (秋山・道崎)	秋山堀込					
26	26		22- 92	松戸七畝割 I (三丁目)	松戸七畝割					
27	27		22- 96	障ヶ前 (貝 台)	松戸貝台					
28	28		22- 95	柿ノ木台	松戸柿ノ木台					
29	29		30-150	木 戸 前	高塚新田木戸前					

※ 貝層形成時期の太線部分は、貝層形成の主たる時期を表す。

土 器 の 型 式	規 模	備 考	主 要 文 献
阿玉台・加曾利E I	地 点	消 滅	松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
阿玉台・勝坂・中峠・加曾利E I・II・III	点在馬蹄形	完掘・消滅	高橋良治・塚田光・小片保「千葉県子と清水貝層調査概報」（考古学雑誌49巻2号）昭和37年 松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
阿玉台・勝坂・加曾利E I・II	地 点	完掘・消滅	松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
花輪台・田戸上層・茅山・関山・黒浜・諸磯b 浮島・興津・阿玉台・加曾利B・安行III b	地 点	完掘・消滅	明治大学考古学研究所[MICROLITH]22号、昭和43年 松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
中期末・堀之内I	点在貝ブロック	発掘・消滅	日本鉄道建設公団東京支社『河原塚II遺跡』昭和52年
茅山・加曾利E III・称名寺・堀之内I・II・加曾利B I	馬蹄形	発掘・一部消滅	大場隆雄『松戸河原塚古墳』昭和34年 松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
加曾利E II・IV・称名寺・堀之内I・加曾利B	地 点	発掘・一部消滅	同総合考古資料刊行会『松戸市金桶台遺跡』昭和49年
茅山・加曾利E II・称名寺・堀之内I・加曾利B	点 在	一 部 消 滅	明治大学考古学研究所[MICROLITH]22号、昭和43年 松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（下総史料館『かみしき』13）昭和50年
茅山・黒浜・阿玉台・加曾利E・称名寺・堀之内	点 在	一 部 消 滅	松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
加曾利E I・II・IV・称名寺	点 在	一 部 消 滅	同 上
五領ヶ台・阿玉台・勝坂・加曾利E I・II・堀之内I・II・加曾利B・安行I・II・III a・III b・III c	馬蹄形	発掘・一部消滅	『浮島』昭和28年・東京都立江北高等学校郷土研究室「千葉県紙敷貝層発掘調査報告」昭和28年 高橋伸男・川上聡・広瀬栄一「千葉県松戸市紙敷貝層」昭和43年
加曾利E II・III・IV・堀之内	地 点	一 部 消 滅	松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
前期・阿玉台・勝坂・中峠・加曾利E I・II	点在馬蹄形	発掘・一部消滅	下総考古学研究会「中峠遺跡発掘調査概要」（『下総考古学』6号）昭和51年
中峠・加曾利E II・IV・称名寺・堀之内I・II・加曾利B I・II・曾谷・安行I・II	地 点	一 部 消 滅	松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
黒浜・阿玉台・勝坂・中峠・加曾利E I・II・称名寺・堀之内I・加曾利B	点在馬蹄形	一 部 消 滅	勝茂喜代治『通源寺遺跡』（下総史料館『かみしき』10）昭和48年
加曾利E I・II・III・IV・堀之内	地 点	一 部 消 滅	松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
興津・勝坂・加曾利E・堀之内	小	消 滅	同 上
阿玉台・勝坂・加曾利E I・II・III・IV・称名寺	地 点	発掘・一部消滅	松戸市教育委員会『松戸市大機大塚郷・内山遺跡の発掘調査報告』（松戸市文化財調査報告3集）昭和46年
阿玉台・勝坂・加曾利E I・II・III・IV・堀之内I	点在貝ブロック	発掘・一部消滅	勝茂喜代治『向山遺跡』（下総史料館『かみしき』7）昭和47年 松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
称名寺・堀之内	地 点	一 部 残 存	松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
勝坂・加曾利E IV・称名寺・堀之内	地 点	一 部 消 滅	同 上
加曾利E IV・称名寺・堀之内I	地 点	一 部 消 滅	松戸市教育委員会『松戸市大機大塚郷・内山遺跡の発掘調査報告』（松戸市文化財調査報告3集）昭和46年
勝坂・加曾利E II・III・称名寺・堀之内I・II・加曾利B	地 点	一 部 消 滅	『松戸市史』上巻、昭和36年 松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
茅山・黒浜・浮島・諸磯b・阿玉台・加曾利E I・II・堀之内I・II	地 点	一 部 破 壊	江森正義『牧ノ内遺跡』（下総史料館『かみしき』6）昭和46年 松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
加曾利E・後期	地 点	消 滅	松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
堀之内	地 点	完掘・消滅	同 上
加曾利E II・称名寺・堀之内I・II・加曾利B I・安行I・II・後期	馬蹄形	発掘・一部残存	松戸市教育委員会『松戸市文化財調査報告』第1集、昭和38年
堀之内I・II	地 点	一 部 残 存	松戸市教育委員会『松戸の遺跡』（松戸市文化財調査報告6集）昭和51年
加曾利E II・堀之内	点 在	一 部 消 滅	同 上

市 川 市

No		県 道 分 布 地 区 No	貝 屋・貝ブロックを含む 遺 跡	所 在 地	貝 屋 形 成 時 期				
通しNo	市町村別				早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期
30	1	22-15	天 殿	大野町2番地2他				?	
31	2	22- 8	大 橋 向 山	北国分町2849番地他					
32	3	22-11	イザナギ神社境内	北国分町3303番地他					
33	4	22-12	橋 現 原	北国分町2839番地1他			?		
34	5	23-13	堀 之 内	北国分町2899番地他					
35	6	22-38	真 木 之 内	国分台6丁目2387番地1他					
36	松戸市 30		一 の 谷 西	高塚新田156番地					
37	8		中 台	中国分3丁目					
38	9	22-46	北 台 (東練兵場・上台)	中国分5丁目566番地1					
39	10	30-50	国 分 平 川	国分5丁目1738番地1他					
40	11	30-52	久 保 上	真間5丁目69番地1他					
41	12	30-57	根 郷 留 見	須和田2丁目381番地・					
42	13	30-55	諸	須和田2丁目402番地2他					
43	14	30-58	曾谷良教家 (東山王)	曾谷4丁目813番地1他		?		?	
44	15	30-60	曾 谷	曾谷2丁目451番地他					
45	16	30-59	イゴ塚	曾谷8丁目825番地他					
46	17	30-61	馬 坂	曾谷3丁目1019番地2他					
47	18	30-62	安国寺境内	曾谷1丁目287番地他					
48	19	30-64	弥 平 田	曾谷3丁目1081番地1他					
49	20	30-63	向 台	曾谷1丁目121番地3他					
50	21	30-66	根 古 屋	曾谷3丁目1083番地5他					
51	22	30-68	高 徳 徳	曾谷1丁目147番地1他					
52	23	30-67	三 中 校 庭	曾谷3丁目4番地他					
53	24	30-69	宮久保A (宮久保)	宮久保2丁目20番地22他					
54	25	30-71	宮久保所願寺 (宮久保坂上・宮久保東)	宮久保4丁目374番地1他					
55	26	30-73	山ノ後	宮久保4丁目693番地他					
56	27	22-23	鳴 神 山 B	大野町195番地5他			?		
57	28	22-24	鳴 神 山 A	大野町4丁目2481番地1他					
58	29	22-26	鳩 下	大野町4丁目3229番地2他					
59	30	22-37	殿 台	大野町4丁目2849番地1他					

土 器 の 型 式	規 模	備 考	主 要 文 献
黒灰・阿玉台・加曾利E・称名寺・堀之内	点 在	一 部 消 滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年 千葉県文化財センター『遺跡分布地図』1、昭和60年
阿玉台・称名寺・堀之内I・加曾利BI	点 在	一 部 消 滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(II) 昭和60年
堀之内・加曾利B・安行	地 点	一 部 残 存	『市川市史』第1巻、昭和46年
加曾利E・称名寺・堀之内I・加曾利B・曾谷・安行I・II	馬 蹄 形	発 掘・保 存	木村英明『千葉県市川市松尾原貝塚緊急発掘調査報告』昭和42年 『市川市史』第1巻、昭和46年
加曾利EII・堀之内I・II・加曾利BII・安行II・IIIa・IIIb・IIIc・大塚BC・CI	馬 蹄 形	発 掘・保 存	杉原莊介他『千葉県堀之内貝塚B地点の調査』(『考古学』3-1) 昭和40年 『市川市史』第1巻、昭和46年
堀之内II・加曾利B	地 点	消 滅	『市川市史』第1巻、昭和46年
加曾利IV・称名寺・堀之内	点 在	発 掘・消 滅	一の谷遺跡調査会『一の谷西貝塚』昭和59年
黒灰・踏破a	地 点	発 掘・消 滅	市川考古博物館『市川の縄文土器』1、昭和61年10月 堀越正行(市川市中央貝塚出土土器の時代群)、『MUSEUMちば』19号、昭和63年3月
黒灰・踏破a・b・c・浮島I・II・III・興津	点在馬蹄形	発掘・一部残存	西村正衛(市川區分旧東越前貝塚)、『早稲田大学教育学部学術研究』10、昭和36年・『市川市史』第1巻・市川考古博物館『上谷貝塚』昭和63年3月
堀之内I	地 点	消 滅	『市川市史』第1巻、昭和46年
黒灰・踏破a・浮島II・興津・加曾利E	地 点	発 掘・消 滅 掘高5~7m・消滅	杉原莊介『須和田遺跡における縄文式貝塚』(『考古学』8-5) 昭和43年 『市川市史』第1巻、昭和46年
関山・黒灰・踏破b・浮島II・五箇ヶ台	地 点	発 掘・消 滅 掘高10m・消滅	同 上
黒灰	地 点	掘高10m・消滅	同 上
前期・後期	地 点	一 部 残 存	『市川市史』第1巻、昭和46年
田戸下層・磐ヶ島台・黒灰・踏破a・b・c・浮島II・興津・十三宮堂・五箇ヶ台・阿玉台・加曾利EII・III・称名寺・堀之内I・II・加曾利BII・III・安行I・II・IIIa	馬 蹄 形	発 掘・保 存	同 上 堀越正行『曾谷貝塚C.D.E地点発掘調査概報』昭和51~53年
黒灰・踏破・堀之内・加曾利B	点 在	掘 高 8 m	『市川市史』第1巻、昭和46年
加曾利E・堀之内・加曾利B・安行I・II	点 在	一 部 残 存	同 上
黒灰・加曾利EII・堀之内・加曾利B	点 在	一 部 残 存	同 上
加曾利E・堀之内・加曾利B・安行I・II	地 点	消 滅	同 上
花鼓下層・黒灰・阿玉台・中峠・勝坂・加曾利EII・III	点在馬蹄形	発掘・一部残存	同 上 戸等次朗『千葉県市川市古遺跡』(『日本考古学』20) 昭和47年
花鼓台・茅山・踏破・五箇ヶ台・下小野・堀之内・安行I・II	地 点	発 掘・消 滅 掘高7m・消滅	J・グロート・保通喜彦『千葉県考古学』貝塚発掘調査予報、昭和26年 『市川市史』第1巻、昭和46年
関山・黒灰・堀之内	地 点	一 部 残 存	『市川市史』第1巻、昭和46年
茅山・花鼓下層・関山・浮島I・踏破b・加曾利B・堀之内I	点 在	一 部 残 存	同 上
茅山・花鼓下層・踏破b	地 点	消 滅	同 上
関山・踏破	地 点	一 部 残 存	同 上
黒灰・加曾利EIII・称名寺	地 点	一 部 消 滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
阿玉台・加曾利EII・III・称名寺・堀之内I・II・加曾利BII	地 点	消 滅	『市川市史』第1巻、昭和46年
茅山・勝坂・阿玉台・加曾利EII・III・III・称名寺・堀之内I・II・加曾利BII	地 点	発 掘・消 滅	戸等次朗『千葉県市川市馬神山遺跡』(『日本考古学』14) 昭和41年 『市川市史』第1巻、昭和46年
称名寺	地 点	一 部 残 存	『市川市史』第1巻、昭和46年
黒灰・踏破a・b・浮島I・II	地 点	発 掘・消 滅	奥山肇他『説台遺跡』(『市川市埋蔵文化財発掘調査報告』第2報) 昭和45年 『市川市史』第1巻、昭和46年

市川市

No.		県道文分布 地 図 No.	貝層・貝ブロックを含む 遺 跡	所 在 地	貝 層 形 成 時 期				
通しNo.	市町村別				早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期
60	31	22- 30	下 台	大野町520番地他					
61	32	30-22-83	大 野 庚 塚	大野町2丁目564番地1他					
62	33	30- 82	一ノ矢 (大野新田)	大野町1丁目436番地1他			?	?	
63	34	30- 78	木 戸 口	下貝塚町435番地1他					
64	35	30- 79	山 王 台	大野町1丁目5番地1他					
65	36	30- 81	庚 塚	曾谷2丁目378番地1他					
66	37	30- 80	下	下貝塚町28番地1他		?			
67	38	30-104	株 木 A (株 木)	柏井町4丁目357番地1他					
68	39	30-105	株 木 B (株 木東)	柏井町4丁目352番地他					
69	40	30-102	新 川 土 A	柏井町4丁目432番地他		?	?		
70	41	30-106	新 田 前	柏井町4丁目479番地1他		?	?	?	
71	42	30-107	池 端	柏井町3丁目551番地1他		?	?	?	
72	43	30-108	杉ノ木台	柏井町3丁目612番地他					
73	44	30-113	卵 塔 前 A	柏井町2丁目759番地他					
74	45	30-109	坂 の 下	率免町95番地1他					
75	46	30-110	率免安楽寺	柏井町98番地他					
76	47	30-111	率 免 南	率免町263番地					
77	48	30-118	姥 山 西	柏井町1丁目1242番地他					
78	49	30-119	姥 山	柏井町1丁目1212番地他					
79	50	30-120	内 荒 久	柏井町1丁目1119番地1他					
80	51	30-121	今 島 田 (唱行寺)	柏井町1丁目1696番地他					
81	52	30-122	今 島 田 東	柏井町1丁目1725番地1他					
82	53	30-124	法 伝	柏井町1丁目1571番地他					
83	54	30-125	三 角	北方町4丁目1709番地1他					
84	55	30-127	七 畝 畑	北方町4丁目1733番地他		?	?		
85	56	30-126	東 新 山	北方町4丁目1779番地3他					
86	57	30-131	貝 柄 塚	若宮3丁目212番地1他					
87	58	30-128	花ヶ谷台	若宮3丁目512番地他	?	?	?	?	
88	59	30-129	美濃輪台 A	本北方3丁目522番地5他					

土 器 の 型 式	規 模	備 考	主 要 文 献
関山・黒浜・浮島Ⅲ・加曽利E・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ	地 点	発 掘	『市川市史』第1巻、昭和46年 堀越正行「下台貝塚A地点」（『昭和53年度埋蔵文化財発掘調査報告』）昭和54年
黒浜・加曽利E	地 点	消 滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1) 昭和60年
加曽利EⅡ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利B	点 在	消 滅	『市川市史』第1巻、昭和46年
阿玉台・勝坂・加曽利E・称名寺・堀之内・加曽利B	地 点	一 部 消 滅	千葉県文化財保護協会『千葉県貝塚』 昭和58年
黒浜・加曽利E・堀之内・称名寺・加曽利B	地 点	一 部 残 存	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1) 昭和60年
黒浜・諸磯a	点 在	一 部 残 存	
関山・黒浜・浮島Ⅰ・加曽利E・堀之内Ⅰ・Ⅱ	馬 蹄 形	一部残存・発掘	『市川市史』第1巻、昭和46年 杉原正介・外内俊文「千葉県市川市東塚貝塚」（『日本考古学年報』）昭和42年
黒浜・諸磯a・浮島Ⅰ・堀之内	点 在	標高約9m・ 一 部 消 滅	『市川市史』第1巻、昭和46年
黒浜・阿玉台・加曽利EⅡ・Ⅲ・称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ	点 在	一 部 消 滅	同 上
前期・中期	地 点	一 部 消 滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1) 昭和60年
前期・中期・後期	点 在	約10m・ 一 部 消 滅	同 上
前期・中期・後期	地 点	一 部 消 滅	同 上
鶴ヶ島台・茅山下層・上層・花畑下層・諸磯b・浮島Ⅰ・Ⅲ・興津・下小野・称名寺・堀之内Ⅰ	点 在	発掘・一部消滅	堀越正行「杉ノ木台遺跡」（『昭和52年度市川市埋蔵文化財発掘調査報告』）昭和53年 堀越正行「杉ノ木台遺跡―第3・4次調査」（昭和54年度埋蔵文化財発掘調査報告）昭和55年
黒浜・加曽利EⅢ・称名寺	点 在	発 掘	堀越正行「御嶺前A遺跡」（『昭和54年度埋蔵文化財発掘調査報告』）昭和55年
諸磯・堀之内	点 在	一 部 消 滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1) 昭和60年
黒浜・勝坂・阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・堀之内・加曽利BⅠ・Ⅱ	点 在 馬 蹄 形	発掘・標高8～9m・一部残存	加藤信夫「幸免安楽寺遺跡」（『昭和56年度市川市埋蔵文化財発掘調査報告』）昭和57年 堀越正行「幸免安楽寺貝塚の掘起す問題」（『史館』14）昭和58年
堀之内	地 点	消 滅	『市川市史』第1巻、昭和46年
加曽利EⅡ・Ⅲ・堀之内Ⅰ	点 在	一 部 消 滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1) 昭和60年
勝坂・阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ・Ⅲ・安行	馬 蹄 形	発掘・保存・ 一 部 消 滅	東京大学人類学教室「下総山に於ける石器時代遺跡」昭和7年 「クワート・後遺跡」堀山貝塚昭和27年 『市川市史』第1巻、昭和46年
加曽利E	点 在	一 部 消 滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1) 昭和60年
勝坂・阿玉台・中峠・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ	点 在	発掘・一部残存	江森正義「千葉県市川市順行寺貝塚の土器について」（『下総考古学』1）昭和39年 堀越正也「寺島田遺跡」（『市川市文化財調査報告第1集』）昭和44年
阿玉台・加曽利E	地 点	一 部 消 滅	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1) 昭和60年
茅山・黒浜・諸磯a・浮島Ⅲ・興津・下小野・五領ヶ台・阿玉台・勝坂・中峠・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ	点 在	半 壊	同 上
茅山・黒浜	地 点	発掘・一部消滅	岡崎文雄「三角遺跡」（昭和54年度市川市東部遺跡群発掘調査報告）昭和55年 千葉県文化財保護協会『千葉県貝塚』 昭和58年
前期・中期	点 在	一 部 消 滅	千葉県文化財保護協会『千葉県貝塚』 昭和58年
黒浜・諸磯a・浮島Ⅲ・興津・下小野・阿玉台・加曽利EⅢ	点 在	発掘・一部消滅	堀越正行「東新山貝塚A地点」（昭和53年度埋蔵文化財発掘調査報告）昭和54年 千葉県文化財保護協会『千葉県貝塚』 昭和58年
加曽利EⅢ・称名寺・加曽利B・安行Ⅰ	地 点	消 滅	『市川市史』第1巻、昭和46年
茅山・前期・中期・後期	地 点	消 滅	千葉県文化財保護協会『千葉県貝塚』 昭和58年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1) 昭和60年
鶴ヶ島台・茅山下層・上層・浮島Ⅲ・下小野・五領ヶ台	地 点	発 掘 ・ 消 滅	戸沢充則「奥豊輪台遺跡―A地点（貝塚）―」（『市立市川博物館研究調査報告』1）昭和48年

鎌ヶ谷市

No		県埋文分布 地図・No	貝層・貝ブロックを含む 遺跡	所 在 地	貝 層 形 成 時 期				
通しNo	市町村別				早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期
89	1	22-46	中 沢	中沢貝柄山1479他					
90	2	22-67	木 戸 脇	中沢木戸脇1396他					
91	3	22-70	一 本 松	中沢一本松1305他			?		
92	4	22-78	栗 子 台 No 2	中沢栗子台1132他					
93	5	22-98	外 和 戸 No 3	中沢外和戸797他					
94	6	22-100	中 台 No 2	中沢中台905他					
95	7	22-101	中 台 No 3	中沢中台855他					
96	8	22-83	根 郷 (根郷No1)	中沢根郷471他					
97	9	22-85	根 郷 No 3	中沢根郷520他					
98	10	22-104	根 崎 No 2	中沢根崎621他					
99	11	22・23-115	中 向	道野辺中向825他					
100	12	22-110	南 久 保 No 2	中沢南久保751他					
101	13	22-112	下 西 山 No 1	道野辺下西山39他					
102	14	30-124	谷 地 川 No 2	中沢谷地川169他					

船 橋 市

No		県埋文分布 地図・No	貝層・貝ブロックを含む 遺 蹟	所 在 地	貝 層 形 成 時 期				
通しNo	市町村別				早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期
103	1	30-102	藤 原 観 音 堂	藤原町2丁目231番地					
104	2	30-106	中 法 伝	上山町2丁目290番地					
105	3	30-103	下 郷 後	上山町1丁目131番地					
106	4	30-104	法 蓮 寺 山	藤原町法蓮寺155番地					
107	5	30-108	宮 前	旭町宮前					
108	6	30-109	後	前貝塚町822番地					
109	7	30-110	前	前貝塚町668, 872~875番地					
110	8	30-111	塚 田 (前貝塚掘込)	前貝塚町6丁目600, 606, 671番地					
111	9	30-112	古 作 (貝柄塚)	古作町94番地					

土 器 の 型 式	規 模	備 考	主 要 文 献
加曽利EⅢ・Ⅳ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利BⅠ・Ⅱ・Ⅲ・阿谷・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	馬 蹄 形	発掘・一部残存	堀上昭分・大杉尹「千葉県葛飾郡鎌ヶ谷町中野発掘報告」(『史学雑誌』8の4)昭和11年 鎌ヶ谷町史編纂委員会「中野発掘」(『鎌ヶ谷町史資料集』2)昭和40年
黒坂・浮島・阿玉台・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・加曽利BⅠ・Ⅱ・安行Ⅰ	地 点	発掘・一部残存	鎌ヶ谷市史編さん委員会『鎌ヶ谷市史』上巻、昭和57年
茅山・阿玉台・加曽利E・堀之内Ⅰ	地 点	一 部 残 存	同 上
阿玉台・加曽利B	地 点	半 壊	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1) 昭和60年
加曽利EⅡ・Ⅲ	地 点	半 壊	同 上
加曽利E	地 点	一 部 消 滅	同 上
中期	地 点	半 壊	同 上
勝坂・阿玉台・中峠・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ	地 点	一 部 残 存	鎌ヶ谷市史編さん委員会『鎌ヶ谷市史』上巻、昭和57年
中期	地 点	一 部 残 存	千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1) 昭和60年
加曽利E	地 点	半 壊	同 上
阿玉台・加曽利E・称名寺	地 点	半 壊	同 上
加曽利E	地 点	半 壊	同 上
加曽利E	地 点	半 壊	同 上
縄文土器	地 点	半 壊	同 上

土 器 の 型 式	規 模	備 考	主 要 文 献
加曽利E・堀之内・加曽利B	点 在	半 壊	船橋市教育委員会『船橋市の遺跡』 昭和52年
加曽利E・堀之内・加曽利B	点 在	一 部 消 滅	同 上 千葉県文化財保護協会『千葉県民の民家』 昭和58年
茅山・黒坂・諸盛・加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・安行Ⅰ・Ⅱ	点 在	発掘・半壊	千葉県都市公社・日本鉄道建設公団『小金線』 昭和48年 千葉県文化財保護協会『千葉県の民家』 昭和58年
黒坂・諸盛a・c・浮島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・興津・十三番堤・阿玉台・加曽利EⅡ・Ⅲ・称名寺・加曽利BⅡ	点 在	発掘・一部残存	同 上
阿玉台・加曽利E・堀之内・加曽利B	点 在	一 部 消 滅	船橋市教育委員会『船橋市の遺跡』 昭和52年 千葉県文化財保護協会『千葉県民の民家』 昭和58年
阿玉台・加曽利E・堀之内	地 点	一 部 残 存	同 上
阿玉台・加曽利E・堀之内	点 在	一 部 消 滅	船橋市教育委員会『船橋市の遺跡』 昭和52年
加曽利E・称名寺・堀之内・加曽利B	点 在 馬 蹄 形	発掘・消滅	同 上
加曽利EⅣ・称名寺Ⅰ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa	馬 蹄 形	発掘・一部残存	船橋市埋蔵調査会『古作民家』 昭和57年 『古作民家』Ⅱ、昭和58年